『地域文化研究』第3号（2000年）
31-45頁

ロシア語教育における
放送メディアとインターネット利用の可能性について

加藤　栄一

1. 序論

これまで、わが国の高等教育機関における第二外国語教育は、週2時間・二年間のペースで実施されるのが一般的であった。しかし、昨今のカリキュラム改編に伴い、基礎文法を一通り説明するのに必要な最低限の授業時間数の確保さえも難しくなってきている。言語習得においては、何よりも学習者自身の努力が求められる。だが、文法学習と文芸作品の訳読に終始する従来型の方法が、「つまらない」「役に立たない」という批判を招き、結果として大学での外国語教育の衰退につながっているのであれば、我々は、より魅力的で効果的な、新しい教育法を積極的に模索すべきではないだろうか。

個人の能力開発を支援することは、教育機関が担う役割の一つである。しかし、何が「能力」であるかを規定するのは、正にその時代性であり、我々は「時代の必要」に常に敏感でなくてはならない。コンピュータ・ネットワークの発展は、あらゆるレベルにおける「グローバル化」を促進させつつある。だが、国際化=英語化とでも言わんばかりの主張が一部に横行し、その影響か、英語のみを必修として第二外国語を必修から除外する大学も多くなっている。けれども、楽観的な「英語統合論」が全くの誤りであることは、電子メールソフトがヴァージョン・アップされる度に、より多言語での使用に対応している事実からしても明白である。インターネットの更なる大衆化は、外国語の運用能力の劣る利用者の増加を意味することを忘れてはならない。英語が異言語話者間のコミュニケーション媒体としての役割を増していることは認めよう。インターネットの世界でも、非英語圏の組織や個人が、英語という「中間媒体」を使って情報発信するケースは増えてはいる。しかし、作り手が専ら使用する言語で作成されるサイトの方が圧倒的に多く、情報的にも詳細である。英語は個々の言語に代替する存在には決してなり得ないのである。国際社会との緊密な関係が不可欠である日本社会にとって、「英語では得られない情報」を的確に捕らえることのできる人材の育成は、重要な能力開発として一層評価されてしかるべきである。

戦後日本は、米国を中心に対外関係を構築してきたため、社会の第一線で活躍している人々の多くが英語には堪能であるが、ロシア語を含めた他の言語となると（著名な民間シンクタンクでさえ）辞書を引いて資料整理ができる程度の人材さえ決定的に不足している。いやしくも近年、日本人が海外で重大な事件・事故に巻き込まれる事案が急増しており、その度に危機管理能力の欠如が指摘され続けているが、現地語での情報収集能力を養成する事は、個人レベルで実践可能な危機管理策の一つである。それゆえ、筆者は、ロシア語教育のレベルでも、実用性を備えた「非文学系の教授法」を確立することが必要であると考える。この点で、マスメディア、特に放送メディア（テレビ・ラジオ）とインターネットの利用は、かかる目的を持った教授法を考察する上で重要な要素となろう。そこで、本論では、日本におけるロシア語教育を念頭に、情報メディアの利用法と教授法への応用を概観する[1]（なお、データはすべて1999年10月現在のものである）。

2. なにが期待できるか

1）学習者の固定概念の打破

日本人の否定的対露観が形成された最大要因は、日露戦争以来、両国の政治的対立が長期に及んだことにある。ロシア社会が曲がりなりにも民主化してから既に10年近く経

過したが、日本のマスメディアで取り上げられるロシア関係の話題は、経済の混乱や、事件・事故・自然災害、不安定な政治状況に集中している。その結果、否定的概念がさらに増幅され、ロシア語受講者が少数に止まる一因となっているように感じられる。
筆者も、ロシアに対して、決して良いイメージを抱いていなかった一人である。しかし、学部の2年の時に、今も続く人気クイズ番組 «Поле Чудес» で、一般の出演者が一喜一憂している姿を見て以来、「ロシア人も人間だ」という至極当然の事実を認識させられ、以降、妙な先入観から解放されたように思う。正に、「百聞は一見にしかず」である。ほとんどの学習者が、ロシアでの生活経験はおろか、渡航経験さえないのだから、テレビを通じて未知のロシア社会を垣間見ることは、学習者の心理的障壁を除去する点で大きな力を発揮する。ロシアに赴任することが決まっている人に教授する際には、きまって、ロシアで人気の高い娯楽番組やニュース・討論番組、子供向け番組のビデオを渡すことにしているが、これは赴任前・赴任後の心的な負担を軽減する上で、少なからぬ効果があることが経験的に確証されている。

2）視覚的・聴覚的理解の促進

ロシア語は、文法体系の複雑さや、共通語彙の少なさから、日本語を母語とする学習者にとって習得の負担が大きな言語に属する。一般の日本人が、イタリア語やフランス語に抱く肯定的イメージもないし、（ロシア人船員が訪れる町を除けば）接する機会など皆無に近い。そして、奇怪なキリル文字を目にするだけで、「難しい」言語として敬遠される、正に「受難の言語」である。それだけに、他の言語以上に学習意欲を持続させる努力を払うことが、ロシア語教師には要求されるのである。

最近の教科書は、対話形式を取り入れるようになり、実用性に乏しい文法事項一本槍のものは少なくなっている。しかし（それぞれに長所があることを認めた上で敢えて述べるが）視覚的魅力の欠如は、日本のロシア語教材に共通する欠点である。視覚的に優れたものを作成するとなると、経費がかさむ割に市場規模が限られているから、商業ベースではなかなか出版できないのである。「言語の虫」は別として、大方の学習者にとっては、テキストだけを用いて基礎文法を学習する事ほど退屈なものはない。一方、アメリカで出版されているロシア語の教科書には、カラー写真や絵が豊富に用いられているものがある。ロシアに滞在することが決まっている者を対象に、短期間で集中的に教授する場合、それらを日本語で書かれた初級文法書と併用すると（明確な目的意識を持っていることあるが）理解が比較的早いように観察される。しかし、元来、別の言語の学習用に編纂されたものをロシア語仕様にしただけのものもあり、現地の実状と合致しない挿絵や写真が使用されているケースが見受けられる。究極的には、教師が自ら収集した写真やビデオなどを見せながら説明するのが、最も確実であろう。しかし、誰もが頻繁にロシアへ足を運べるわけではなく、現地で資料収集をするにしても、高価なカメラやビデオ機材を町中で使用するのは防犯上好ましくない。最近は、パソコン性能の向上で、ビデオ画像の編集が容易になっているから、テレビの画像をうまく活用できれば、時代の変化に迅速に対応した資料作成が安全且つ安価に行える利点がある。

リスニング能力の向上を図る点で、音声教材が有効であることは、多くの教材に付属カセットやCDが用意されていることからも認められる。しかし、それらの副教材は「教科書」という環境の為に、スピード、発音の仕方などを人為的に調整して音声化したものであり、それだけに頼っていては実際的な聞き取り能力の向上は望めない。無論、テレビ・ラジオ放送にも人為的な部分がある。しかし、放送は現実社会における言語使用の一形態であり、より実際的な語学教育を実施する上で有効なツールとなる。ある言語を外国語として習得する場合、どのようなレベルの言語を学習するかも問題になるが、放送メディアで使用される言語は（番組内容によって差はあるものの）品格を備えた文章語としても十分通用するレベルの言語であり、大人の外国人学習者が、最初に習得するのに適している。

3）「文化能力」の育成

経済事情の変化もあって、ロシアではテレビ視聴が市民の余暇に占める割合が大きくなり、現代文化の発信源として、新聞・雑誌などの活字メディアにまで、テレビが大きな影響を及ぼしている。ネウストプニーが、「相手社会についての普通程度の知識、たとえば、最近おこった事件の知識をもっていない外国人は、食卓の会話からはずれる。相手社会の経済、社会、文化などを知らないし、これらの領域で適切に行動できないのは外国人の大きな特徴である。そして、この不適切さは、実際行動に関する問題を導くと同時に、コミュニケーション上の問題にも導くのである」と指摘するように[2]、言語外の「文化能力」を向上させることは、一層効果的な言語運用能力を養成する事につながるから、この観点からもテレビ番組の積極的活用は望ましいといえよう。

テレビで取り上げられる題材は、政治・社会に限らず、歴史・宗教・音楽・料理等々多岐にわたり、一般に撮影の難しい場所（会社・銀行・教会内部・犯罪の捜査現場・軍事関連施設・刑務所など）の映像を入手できる点で貴重である。また、何気なく映される街頭風景や、人々がみせる仕草や話し方などに、言語・非言語コミュニケーションの具体例を多く見いだすことができる。

個別の言語の背景にある文化について知ることも重要だが、世界が共時的に共有する側面について取り上げることも、現代社会においては大切である。これは、単に、政治・経済分野のみを指すわけではない。たとえば、日本人なら誰でも知っている「猫ふんじゃった」は、ロシアでもよく知られているが、ロシア語のタイトルまでは、なかなかわからないものだ。これが、«Собачий вальс»「犬のワルツ」であると筆者が知ったのは、1999年6月まで放送されていた«Угадай Мелодию»というイントロ・クイズ番組であった。近年、ロシアのテレビでは、日本でも有名な外国製のテレビ・ドラマや映画が多く放送されているが[3]、邦題を露訳してもまったく通じないものがほとんどである。意外なところで進展する両国の文化共有を取り上げることで、学習者の関心を高める効果も期待できる。

4）教師自身の語学・文化力の向上

自分の専門分野に没頭してしまうと、他の事柄に視野を広げるのはなかなか難しいものだ。特に、筆者の様に現代語から離れた分野を研究対象にしていると、意識的に努力しないと、語学力・文化力の向上を怠りがちになる。一般に、「ロシア語がわかる」ことは「ロシアについて全部知っている」と誤解されがちで、自分の専門以外の事柄への質問を受けることもしばしばあり、視野を広げておかなかったばかりに困った場面に遭遇するのも、ロシア語関係者共通の悩みである。多彩な分野の情報を提供するテレビ・ラジオは、情報収集の強力な武器となる。ニュースを通じて、時事表現に接することができるのはいうまでもないが、ラジオではアカデミー会員が出演して現代ロシア語の諸相について取り上げる番組（たとえば、«Радио России»の番組«Как это по-русски?»など）も放送されており、「ことば」そのものについて考える機会にもなる。

2. 放送メディア利用の技術的側面

筆者のように、外国のラジオ放送の受信をきっかけに外国語への興味を持った者は別として、伝統的な文系の諸兄諸姉は、外国放送の受信には縁遠いことであろう。そこで、技術的な側面にも若干触れておこうと思う。従来、ロシアの放送の直接受信とは、長波・中波・短波によるラジオ放送の受信を指していた。ソ連時代、国策宣伝のために海外向け放送設備が整備されたことから、ロシアには500KWないし1000KWの高出力の短波送信機がある。また、国内向け放送にも1000KWを越える中波・長波高出力送信機が使用されており、日本は比較的容易にロシア語放送が受信できる地理的環境にあった[4]。しかし、使用される電波の性質上、

1）混信・フェーディング・空電の影響を受けやすく、満足ゆく音質を確保しがたい

2）周波数帯によっては、電離層の関係で夜間・早朝に受信時間が限られる
という不可避な障害がある。さらに、近年、財政難からロシア政府は海外向け放送の予算を大幅に縮小し、国内放送も一部が放送停止を余儀なくされている。高層建築物の出現や雑音を発する電気機器の増加の影響で、受信側の環境も年々悪化している。このような理由から、ロシア語教育における放送メディアの活用は、主として個人のレベルに止まり、教室への積極的な導入にまでは至らなかった。

しかし、1980年代後半から、東経140度上のロシア衛星STATIONAR-7で中継されるソビエト中央テレビ（当時）の直接受信が注目されるようになる。当初は、大学などの研究機関を中心に受信設備が設置されたが、数年の間に、機材価格は個人にも十分入手可能な程度にまで下落した。筆者は、1992年に自宅に受信設備を設置したが、約30万円程の出費であったと記憶している。このおかげで、上述のラジオ受信に伴う障害が取り払われたばかりか、入手自体が困難であった映像が利用可能になったのである[5]。

日本では、表1の通り複数のロシア衛星の受信が可能であるが、技術的に受信が最も易しいのは、STATIONAR-7の «OPT»「ロシア公共テレビ」（カムチャツカ半島向けに時差送信されている«ОРБИТА-1»）と副音声を使用している«Радио Маяк» «Радио России»の二つのラジオ局（モスクワと同時放送）である[6]。

表.1. 日本で受信可能なロシアの衛星テレビ（1999年8月現在）

局名	周波数 (GHz)	偏波	音声周波数 (MHz)	放送方式	衛星名
RTR	3.875	右	7.5	SECAM	STATSIONAR-16
KHABAR-OVSK TV	11.525	右	7	SECAM	〃
ORT	3.675	右	7	SECAM	STATSIONAR-7
RTR	3.875	右	7.5	SECAM	〃
TNT	3.725	左		DVB,SR6108,FEC3/4	GORIZONT29
NTV	3.675	左	7	SECAM	〃
RTR	3.675	右	7	SECAM	STATSIONAR-21
STS	3.72	右		DVB,SR6500,FEC3/4	〃
RTR	3.675	右	7	SECAM	STATSIONAR-6
ORT	3.875	右	7.5	SECAM	〃
TV6 MOSKVA	3.875	右	7.5	PAL	STATSIONAR-13
AST	4.02	右	7.5	PAL	〃
TV CENTR	4.125	右	6.6	SECAM	〃

（出典：月刊サテライトマガジン　1999年9月号。同誌編集部の許可を得て転載。）

注1）STATSIONAR-7の　ORT　は、直径0.9-1.2メートルのアンテナで受信が可能であるが、それ以外の受信には、2メートルから5メートル以上のアンテナが必要とされる。
注2）STATSIONAR-7のORT副音声によるラジオ放送の音声周波数は、«Радио　Маяк»　が7.5MHz, «Радио России»が8.0MHzである。

しかしながら、STATIONAR-7の受信に際しては、以下の技術的問題をクリアーしなければならない。

1）機材の入手と設備の設置に関する問題

受信に最低限必要な機材は、

1）パラボラアンテナ（90～120センチ以上）
2）Cバンド用LNB (Low Noise Block down converter = LNB)
3）フィードホン（LNBと一体型になっているものもある）
4）衛星アナログチューナー（後述）
5）テレビ受像機およびビデオデッキ（後述）
6）衛星受信用のケーブル類・アンテナ用の支柱

である[7]。使用周波数帯の違いや、テレビ放送のカラーシステムの違いから、ロシア衛星の受信には（ケーブル類を除き）日本国内向けのＢＳ/ＣＳ放送用機材は原則として使用できない。従って、上述の機材は一般の電気店では入手不可能であり、専門誌に掲載される広告を頼りに、販売店を探して店頭で購入するか、通信販売で購入することになる。基本的には、それぞれのパーツを単品で購入する事になるが、同一性能を唱っていても製造業者によってかなり差があり（特にLNBに関しては注意）、全くの初心者にとって信用できる製品を見極めるのはなかなか難しい。具体的な製品情報を専門誌で収集する事が先決である。一部の販売店では、STATIONAR-7受信用の機材一式をセット販売しているが、必ずしも質的に最良の機材の組み合わせではないこともあり得る。すべてをそろえると、機材だけで20万円～30万円程度の費用が見込まれることから、購入に際しては、必ず複数の販売店を比較・検討し、慎重を期することを勧める。

Cバンド（4GHz帯）使用の衛星受信には、通常直径２メートル以上のアンテナが必要とされるが、STATIONAR-7からの電波は強力であり、直径90-120センチの比較的小さなアンテナで受信が可能である。しかし、それでも日本のＢＳ放送用アンテナの２-３倍の大きさとなるから、設置にはある程度広いスペースの確保と、強風・降雪などを考慮した安全対策（地中にコンクリート基盤を埋めたポールを設置するか、ベランダに設置する場合は、大型アンテナ用の機材で頑丈に固定する）が求められる。強風の影響で万一アンテナが転倒してしまうと、微妙なゆがみが生じノイズの多い画像の原因となるから、材質や厚さにも気をつけるべきである。国産品は性能に優れてはいるが、価格は相当に高価である。一方、アジア諸国製は安価であるが、材質の点で問題がある。筆者は米国製アンテナを使用しているが、性能的にも価格的にもバランスのとれた満足できるものである（４万円弱）。しかし、組立の勝手が悪く予想以上に困難を伴った。

STATIONAR-7受信には、アナログ方式に対応したチューナーが必要である。しかし、世界的な衛星放送のデジタル化に伴い、国内で現在入手可能な海外衛星用チューナーは、デジタル方式対応のものが主流で、アナログ専用チューナーの入手が困難になりつつある（デジタル・アナログコンパチブルのチューナーも販売されているが、価格は７万円弱から）。最近、筆者は機材の劣化のため交換を迫られたが、国産品の製造は既に打ち切られており、販売店によっては中古品をすすめるところもあったほどである。結局、韓国製の南米輸出向けの新品を２万円ほどで入手できたが、取扱説明書がポルトガル語なのには閉口した。

2）カラーシステムの違い　わが国のカラーシステムは米国や韓国と同じNTSC方式であるが、ロシアでは走査線の数自体が異なるSECAM方式が採用されており、互換性は無い。従って、
1）SECAMからNTSCに変換するコンバータを使用する（画質の劣化は免れないが、既存のテレビ受像機・ビデオが利用できる強みがある）
2）SECAM対応のビデオデッキとテレビ受像機を購入する（現実には、NTSC/PAL/SECAMをカバーするマルチシステム対応の機材を購入する事になる。輸出向け製品を扱う免税店でのみ入手可。価格的には、国内向けモデルとほぼ同等～1.2倍程度だが、日本国内での使用を想定した機能［二か国語放送受信機能など］を備えている機種は限られている）

のいずれかを選択せねばならない。

3）受信にまつわる問題　アンテナは真南に向け、仰角45度に設置する[8]。その際、高層建築物などの障害物がないことが受信の必須条件となる。加えて、衛星の使用周波数が、地上通信回線で使用される周波数（マイクロ波）に近いことから、受信地の近くに中継基地がある場合、受信自体が不可能となるケースがあることが指摘されている。

STATIONAR-7は、静止衛星ではあるが、一日の周期内に南北方向に大きく変動する「インクラインド衛星」に属する。そのため、最良の画質・音質で受信するためには、数時間ごとにアンテナ仰角を調節する必要がある。手動ないしは電動アクチュエーターを使用し、画像を見ながらアンテナ仰角調節を行うのが最善であるが、それが不可能な場合は、受信状態が悪化する時間帯が生じることを覚悟して、最もよく視聴する時間の仰角で固定することになる。しかし、衛星側で姿勢制御が行われた場合などには、再度調整が必要となるのは言うまでもない。

3. 教材としての放送メディア

1）初級段階での活用は可能か

初級段階から放送メディアを教材として活用することに対しては、その有効性を疑問視する向きもあるだろう。確かに、入門者向けにスピードを調節してあるわけではなく、いきなりすべてを理解させようとするのは無理である。しかし、学習のごく初期の段階から放送メディアを学習に取り入れることにより、以下の点での効果が期待できる。

・学習対象言語の持つ音声的特徴への順応

ロシア語専攻学生の中にも、英語からの類推に基づく発音（たとえば、前舌顫動音（いわゆる「巻き舌」）の p [er] を、英語的に前舌摩擦音で発音したり、ロシア語に独特な単純疑問文のイントネーション（疑問の中心となる語のアクセント母音を急上昇させる）を、文末を上げる英語のイントネーションで代用する傾向）から脱するのが難しい者がいる。日本の日常的な環境では、英語以外の外国語の音声にふれることは希であり、聴覚的理解の向上と、正しい発音・イントネーションを習得させる為には、新たに学習する言語の音声的特性を、学習者自身が実際に認識できる手段を備えることが必要である。文字と発音の学習に入る段階で、ラジオ番組のテープを各自に配布する方法は、この点で効果的である。音声的特色を示すことを目的とすると、音声言語中心の番組（文芸作品の朗読や、延々と続く対談番組など）を選択しがちであるが、流行曲やコマーシャルなどを含むラジオ番組を使用する方が、学習者の心理的負担を軽減する効果があることも考慮すべきである。

・学習事項の確実な定着

ロシア語の最初期の学習内容には、文字・数字・簡単な挨拶表現などが含まれるが、教科書だけを用いた学習では、無味乾燥になりがちである。一通り教科書を使って説明した後、学習事項がどのように使用されるのか、視聴覚的に示すことが確実な定着を促す。実際にどのような利用が可能か、例を挙げてみよう。

a) 文字の習得

キリル文字には、ラテン文字とは同一字形でも音価が異なったり、類似性が全くない文字が多く、アルファベットの習得が、最初の学習上の難関となる。«Поле Чудес» のような、ボード上に隠された短い語を一字一字当ててゆく形式のクイズ番組を用いるなら、それぞれのアルファベットの読み方を示すことができる[9]。ロシア語の地名表記を用いて文字を学習させる方法は、初級者用の教科書の多くで採用されているが、これをテレビの天気予報を用いて応用することができる。ロシアや旧ソビエト諸国の主要都市の位

置関係も、同時に学習させることができる利点がある。

b) 数詞の習得

数詞も放送を教材に用いることにより、より実際的なシチュエーションで発展的学習を促すことができる。まず、コマーシャルで読み上げられる電話番号を書き取らせる方法が考えられる。ロシア語では、電話番号は二桁の数字の組み合わせとして読み上げられるのが普通である（例：52-42-36 は пятьдесят два/сорок два/ тридцать шесть となる）から、100までの数字を学習した段階で、すぐに取り上げることができる[10]。また、ロシアの天気予報では、気温が必ずといってよいほど発表されるが、ロシアでは摂氏を用いているから、二桁までの数字を知っていれば十分に足りる。その際、数詞と名詞 градус 「度」の組み合わせによっては、名詞格に変化が生じる独特の現象を認識させることができ、後日、文法的説明をスムーズに行える。対米ドル為替相場も（ハイパーインフレに再度襲われることがない限り）二桁の数字と通貨単位の組み合わせであるから、天気予報同様の使用が可能である。時間を教える際には、OPT が日に数度、放送時刻の予告をしているから、時間のところだけを空欄にしたテキストを準備し、テープを聴かせて穴埋めさせる方法も可能である。実際に放送を録音したテープを聴かせると、学習者の集中力を非常に高める効果がある。最初のうちは、なかなか聞き取るのが難しいが、繰り返し聞くうちに、ほとんどの学習者がリスニングの要領をつかみ、きわめて短時間で数詞の定着を図ることができた。

c) 挨拶表現の習得

簡単な挨拶の表現は、しばしば文字の学習に先立つ学習事項である。しかし、«Как вас зовут?» «Кем вы работаете?» など、自己紹介に必要な表現も、教室で学生同士で役割練習ばかりさせると、白けたムードになってしまう。放送番組は、視聴者に対する「ごあいさつ」から始まるのが万国共通であるから、これを活用すれば授業が単調になることを防ぐことができる。ある程度進んできたら、視聴者参加型の娯楽番組（具体的には、OPT の«Поле Чудес» や、«Звездный час»（子供向け教養クイズ番組）など）で、司会者が参加者に自己紹介を促す場面を見せると良いだろう。使用されている語彙は、初級一年時用の教科書に用いられるものがほとんどで、文法事項も基本的なものばかりである。教師が対話を文字に直すとしても、この程度のテキストであれば、さほど時間はとられない。初級クラスでも、ちょっとした工夫で、「教科書を離れる」ことは十分に可能である。

例）«Поле Чудес» に参加した解答者（二十代後半から三十代前半ぐらいの男性）の連れの少年（12歳ぐらい）と、司会者の会話。

司会者：（解答者をさして）Это ваш брат?
少年：Нет.
司会者：Дядя?
少年：（首を振る）
司会者：Дед?
少年：（首を振る）
司会者：Мать?（会場爆笑）А кто это?
少年：Он в деревне работает.
司会者：Что о нем знаете?
少年：Практически ничего.（爆笑）
司会者：А он у вас в деревне кем работает?
少年：Не знаю. Он временем не работает.
司会者：Да, я понимаю, но он живет в деревне?

少年：Да.
司会者：Он.... в доме живет?
少年：Ага, где еще? (笑い)
司会者：Нет, нет, я спрашиваю. Он в доме живет. А на улице он ходит?
少年：Да.
司会者：А что делает?
少年：Не знаю. (爆笑)
司会者：А.... логичен вопрос. И все в этом деревне с этим занимаются?
少年：Не знаю. Я сам в городе живу. (爆笑)
司会者：Спасибо вам огромное. Идите к «дяде». (笑い)

(1999年9月放送分より)

2) 初等文法以降の活用法

初級文法を一応終えた二年次のレベルでは、これまでの学習事項（特に名詞格・動詞の体の用法、格支配の諸形態）を長めの文章の中で理解させ、その定着を図ることが学習の目標となる。一般的には、物語や短編小説からとられたテキストを用いて教授されてきたわけだが、昨今は学生の学力低下が指摘されるとはいえ、20歳前後の若者にとって、幼児向けの童話類を授業で読まされることには、心理的抵抗感がつきまとう。逆に、教材選定に際して、研究者としての教師の意向が強く反映され、使用頻度が著しく低い語彙ばかりが並ぶ難解な文学作品が用いられるケースも少なからずある。構文的には易しい文章であったとしても、非日常的な「芸術的」表現の多用される文学作品や、難解な哲学的論考、また、学習者にとってほとんどなじみのない分野に関する内容のテキストを、基礎的読解力の養成を目的とするクラスで用いるなら、学習者に「いくら真面目に予習しても、わからない」と感じさせて学習意欲をそいでしまい、結果的に学習者を混乱させるだけに終わる場合もある[11]。

このレベルの学習者は、わからない単語を辞書で調べて、文法事項を確認し、何とか和訳するので精一杯である。筆者も含め、一度ならず教室で「珍訳」を披露してしまい赤面した経験を誰もが持っているだろう。初出のテキストを読む場合、我々は、これまでの経験や知識に基づき、ある程度展開を予想しながら読み進んでゆく。誤訳は、その予想がはずれてしまった結果として生じるものである。そのようなわけで、このレベルの教授に用いるテキストは、学習者が既知の情報を活用して予想を立てることが容易であるものが好ましい[12]。その点、不特定多数に的確な情報伝達を目的とするマス・メディアの言語材料は（内容にもよるが）初等文法後の教材として適当なものであると言える。

とはいえ、活字メディアと放送メディアでは役割が異なり、言語特性もおのずと異なってくる。前者は文章による情報伝達を意図し、内容的により深く掘り下げた報道を得意とするため、論説記事はいうまでもなく、事件・事故を伝える短い記事でも、文学作品同様、文体的に相当に凝ったものがあり、すべてが教材に適している訳ではない。これに対し、放送メディア、特にニュースで使用される原稿は、音声による情報伝達を意図するものであり、限られた時間内で、如何に正確に情報を伝達するかに重きが置かれていることから、一つの文は比較的短く、構文的にも簡明である。

活字メディアを用いた教材作成は比較的容易であり、これまでも教室で活用されてきた。しかし、とりわけ第二外国語の教室では（台本が運良く入手できた映画が使用されることはあっても）ニュースなどの利用あまり進んでいない。最大の障害は、放送原稿のテキスト化にかかる手間が馬鹿にならない点にある。ネイティブの外国人講師の協力

の得られる教育機関ならば、比較的短時間で教材の準備は可能かもしれないが、それでも教師の側の負担は大きい。

だが、インターネットの普及は、そのような現状を変化させつつある。一部の放送局は、放送で使用されたのとほぼ同じテキストを、即日ないしは翌日までにホームページにアップロードしているのである。インターネット連動のサービスを無料で提供している放送局は、«Радио Маяк», «ОРТ» の他、日本では直接受信できないがモスクワのラジオ局 «Exo Москвы» などがある[13]。本稿執筆時点では、筆者は«Радио России» のホームページを確認していないが、系列のテレビ局 «РТР» はインターネット上でのニュース情報の提供を行っている。これらのリソースの活用は、教材準備の負担を大幅に軽減するばかりか、電子テキストの長所を生かした教材づくり（アルファベット順の語彙集の作成、保存に適したサイズでの教材作成など）を可能とする。教授上の効果を高める音声教材が併用できる点も、活字メディアにはない利点である。

3）放送と連動したインターネット・リソースの活用例　—　«Маяк»を例に

«Маяк» は、ロシア全土と旧ソビエト諸国をカバーする24時間放送である。番組編成は、毎正時と30分にニュースがあり、その合間に天気予報や、記者リポート、街頭インタビュー、時事解説、新聞論調、リクエスト番組、宗教番組など多種多様な番組が流されるから、様々な分野の情報に接することが可能である[14]。«Радио России» の番組編成に比べ、一つのコーナーの時間が相対的に短く、音楽が多く流れるのも «Маяк» の特色で、日本のラジオ番組の構成に比較的近い作りのためか、親しみやすく飽きずに聴取できる。インターネットのホームページ(http://www.radiomayak.ru)も開設されており、次の番組の原稿・関連情報がダウンロードできる（ただし、ロシアのマスコミ各社のホームページ同様、しばしば更新が遅れるのが難点ではあるが）。

ニュース（当日分のみ）
«День в Истории»（アーカイブあり）
«Карта России»（当日分のみ）
«Международный репортаж»（当日分のみ）
«Музыкальная гостиная»（アーカイブあり）
«Политический Олимп»（アーカイブあり）

«День Истории» は、「今日は何の日」的な番組で、5分程度の放送時間の中で、古代から現代に至るまでの歴史エピソードが、約10項目程度取り上げられる。«Карта России», «Международный репортаж» は、特定の一つのテーマを扱う2-3分程度の記者リポートである。«Музыкальная гостиная» と«Политический Олимп» は、25分程度のインタビュー番組で、前者は芸能関係者、後者は主として有名政治家・官僚・学者が出演する。共に、インタビューアーとの対談の最後に、聴取者からの電話による質問に答えるコーナーがあるのが通例である。

«День Истории» は、一つ一つの項目が短く、歴史エピソードの中には学習者にとって既知の内容のものが含まれている。

> 2-го сентября 1945-го года на борту американского линкора «Миссури» представители СССР, США, Великобритании, других государств подписали совместный документ о капитуляции Японии. Так закончилась вторая мировая война.

訳例：「1945年9月2日、アメリカの戦艦「ミズーリ」艦上で、ソ連、アメリカ、英国他各国の代表者が、日本降伏に関する共同文書に調印しました。これにより第二次世界大戦は終結しました。」（1999年9月2日放送）

9 сентября 1828 года - день рождения графа Льва Толстого, величайшего писателя всех времен и народов. Исследователи считают, что как мыслитель и автор своеобразной философско-рилигиозной системы Толстой до сих пор недооценен.

訳例：「1828年9月9日は、人類史に残る偉大な作家レフ・トルストイの誕生日です。思想家、そして独自の宗教哲学体系の構想者としてのトルストイについては、今日に至るまで過小評価されていると研究者は指摘しています。」（1999年9月9日放送）

実際に放送で読まれる際のスピードは、初級向けにしては早めであるし、バックに音楽が入る点がやや気にかかる。しかし、分量的に短く内容もわかりやすいから、翻訳論に興味のある学習者を対象とした授業では、母語への翻訳の方法を実際に検討させる材料として用いるのに適している。たとえば、 «величайший писатель всех времен и народов» は、直訳では「すべての時代と諸民族の最も偉大な作家」となるが、日本語としては、あまりに不自然である。ともすると、語学力の乏しい者に翻訳という行為は無理と教師の側が決めつけて、直訳的理解ばかりを学生に押しつけがちであるが、これが外国語を学生から疎遠なものとしているのではないだろうか。コミュニケーション手段としての「ことば」の役割を再認識させるためにも、適切な表現法を受講者の間で検討させるならば、受け身に終わりがちな第二外国語の授業を、全員参加型の場として活性化することができる。無論、文法構造が正しく理解できているか確認することは大切で、語の関係を黒板上で図式的に説明させる等の方法を併用すると効果的である。

«Карта России», «Международный репортаж» は、ニュースや、«День Истории» よりも、分量的にまとまったものである。様々な項目が短い時間で次々と変わるニュースとは違い、一つのテーマについて扱われるから、内容的なまとまりをもった教材といえる。地方からの記者リポートは、電話による場合が多く、放送では聞き取りにくい場合もあり、全文原稿の利用は特に効果的と言える。しかし、専門的な語彙も多く、記者によっては、活字メディアの論調の様に凝った文学的文体を用いる傾向も見られる。それゆえ、使用に当たっては、適当な分量に分割して、辞書で引きやすい形の語彙リストを付けたり、難語には注釈をつけるなどしておくべきであろう。例に挙げる程度の難度であれば、第二外国語のクラスでも、二年時の総まとめの教材として用いたり、あるいは長期休暇中に課題として挑戦させてみることが可能であろう。

例）エイズ治療をめぐる詐欺的行為についてのレポート

В Калининграде тема борьбы со СПИДом у каждого на слуху, город занимает печальное первое место в стране по количеству ВИЧ инфицированных. Их число перевалило здесь уже цифру в 3 тысячи и стремительно растет. Поэтому мэр Калининграда Юрий Савенко поддержал инициативу местных медиков по установлению прямых профессиональных связей с Левоном Геворкяном - ереванским руководителем программы "Арменикум". В Ереване уже побывала группа калининградских врачей, которые наблюдали впечатляющие результаты лечения новым препаратом. Калининградец Николай Колесников прошел курс лечения в клинике Геворкяна, и его возвращение домой со значительным улучшением здоровья стало местной сенсацией. Многие калининградцы, состо-

ящие на учете в центре "Анти-СПИД", пытаются получить направление на лечение в Армению, однако не могут этого сделать, так как нет еще научного обоснования нового метода и, соответственно, разрешения Минздрава России. На этом фоне в Калининграде начала действовать организация, эмиссары которой берутся за 10 тысяч долларов устроить желающих в клинику Геворкяна в Ереван. В наш центр "Анти-СПИД" пришел господин с южным акцентом, лет 40-ка, с "мобильником", в элегантном костюме. Он представился коллегой из Армении и попросил дать ему списки с адресами и фамилиями ВИЧ инфицированных. Рассказывает заведующая диспансерным отделением центра Анна Васильева.

- Мне позвонил по телефону незнакомый мужчина и предложил поехать на лечение в Ереван, - говорит состоящий на учете в Калининградском центре калининградец Н. Он сказал, что прибыл от господина Геворкяна специально для формирования группы. Однако деньги почему-то просил вперед.

Таких сообщений в центр "Анти-СПИД", в милицию и прокуратуру поступает в последнее время все больше. Иногда в гости к больным приходят визитеры и просят заполнить анкеты и договор на оплату лечения. Никаких доказательств, что они действительно являются сотрудниками ереванской клиники, гости, как правило, не имеют и, получив отказ, тут же уходят, не оставив координат. Однако многие, поверив, собирают и отдают деньги, получая взамен квитанцию со штампом "оплачено". Сам Левон Геворкян, когда журналисты позвонили ему в Ереван, с возмущением заявил, что никаких эмиссаров на места не посылал, что его клиника денег за лечение не берет, и выразил надежду, что местные правовые органы раскроют и предадут суду преступную группу. Надеемся, что так оно и будет. Станислав Чекалин, "Маяк", Калининград.

(1999年9月9日放送分より)

«Музыкальная гостиная»と«Политический Олимп» は、実際の対話（外国人にとってはテキスト化するのが最も難しいと思われる）をインターネット上で完全に再録されており、日本人学習者があまり得意としない質問の仕方を学習したり、文字上の表記と実際の会話での発音との違いを学習する点で、とりわけ有用なツールである。インタビューされる相手は、アナウンサーや役者などの「はなしことば」の専門家ではないから、発音などの点では、やや聞き取りにくい場合もあるが、再録テキストは、これをカバーしてくれる。番組全体を教材として用いるのは分量的に多くなりすぎるから、学習上必要な部分だけを取り出して部分的に使用することができる。しかし、文章語とは違う口語ならではの難しさ（辞書には載っていない語彙の使用、談話の不統一性、相手が発言している最中でも、自分の発言を大声で始めるロシア人に特有な傾向など）があり、話のテーマはロシアの国内事情が中心となるから、外国人には内容が理解しづらい面がある。これらの番組を本格的に教材として取り上げることが可能になるのは、ロシア語専攻課程の3年次以降ではないだろうか。

- Здравствуйте, в студии Валерий Санфиров. Сегодня гость радиокомпании "Маяк" - это радиостанций "Маяк" и "Юность" заместитель министра по налогам и сборам и статс-секретарь Министерства Сергей Николаевич Шульгин. Здравствуйте, Сергей Николаевич.

-Доброе утро.

- Сергей Николаевич, основная тема нашей беседы сегодня будут - итоги сбора налога в сентябре, законодательная инициатива Министерства. Но начать я все же хотел с несколько другой темы. На мой взгляд, может субъективный конечно, в последнее время и общество налогоплательщиков и граждане стали меньше ругать налоговую службу, может быть, это как-то связано с выборами, я не знаю. А вот вы ощущаете небольшое такое снижение прессы на себе?

- Нет, я думаю, что это связано с лучшей нашей работой.

-Я тоже так думаю. Ну тогда перейдем к итогам сентября. Я думаю, что у вас есть повод гордиться, согласно предварительным данным, у вас действительно опять перевыполнение плана, так?

- Ну не предварительным, а уточненным уже данным за сентябрь месяц мы собрали живыми деньгами 30,6 миллиарда рублей. Если сравнивать эту цифру с бюджетными назначениями, то она в полтора раза больше, чем это было предусмотрено по закону о бюджете. Если сравнивать ее с заданиями, которые нам устанавливает правительство, то мы выполнили это задание на 101,7 процентов. Если говорить о собираемости налога в целом за прошедшее время, за 9 месяцев, то и здесь мы обеспечили выполнение как бюджетного задания, так и задания правительства с учетом дополнительных, по мобилизации дополнительных источников. И еще, наверное, я думаю, помнят наши радиослушатели, когда в свое время производственные коллективы рапортовали, что к 1 ноября там выполнили годовой план. Я думаю, что мы годовой бюджет, бюджетное назначение тоже к 1 ноября обеспечим выполнением по доходам.

- Если не ошибаюсь у вас в ноябре профессиональный праздник, по-моему, День работников налоговой службы или как?

- Здесь да 21 ноября у нас профессиональный праздник, начиная от Указа президента Российской Федерации о создании Государственной налоговой службы РоссийскойФедерации. (以下略)　　(1999年10月7日放送分)

インターネット上の«Маяк»のニュースは、平日はモスクワ時間の17時ないし18時代に更新されるが、STATIONAR-7　が停波している時間に当たるためニュースの録音は難しい。しかも、«Маяк»のニュースには音楽がかぶさるので、学習用教材として用いるにはやや難がある。これに対し、«Радио России» のニュースは、音楽がかぶることはないから、教材として用いるには後者の方が適切のように思われる。リスニング力の強化に主眼に置くのであれば、入手できるテキストと音声資料が、必ずしも一字一句一致している必要はない。英語に比べ、綴りと発音の関係が比較的一致しているロシア語の場合、耳で聞いた音声を頼りに辞書を引く訓練を、早い段階から行うことは十分可能である。新聞やインターネット・リソースなどを用いて、ある程度関連語彙を学習した後で、内容的に符号するものを聞かせるのが効果的であろう。«Маяк» «Радио России»のどちらの放送局も、«ИТАР-ТАСС» «ИНТЕРФАКС» «РИА-НОВОСТИ» などの通信社から提供されるリソースを用いており、報道内容の違いはさほど大きくない。取り上げられるのは、主としてロシア及び旧ソ連諸国の政治・経済・事件関連のニュースであるが、日本国内の動静も比較的頻繁に取り上げられている。

例）インターネット上の «Маяк» ニュース・サービスより（茨城県東海村のウラン燃料加工施設での放射能漏れ事故関連の部分のみ抜粋）。

- Ни один российский гражданин не пострадал в результате крупнейшей в истории Японии аварии на ядерном объекте в городе Токай-мура недалеко от Токио. Авария произошла в Четверг и сопровождалась мощным выбросом радиации.

Однако 45 граждан России находятся сейчас в зоне особых мер безопасности, которая создана местными властями в радиусе 10 километров вокруг пострадавшего предприятия. Об этом сообщает ИТАР-ТАСС со ссылкой на представителя консульского отдела посольства Российской Федерации в Токио.

- Соединенные Штаты и Россия готовы направить в Японию совместную группу экспертов-ядерщиков, чтобы помочь в преодолении последствий утечки радиации. Утечка произошла в четверг на заводе по производству ядерного топлива в Токаймуре. Американские и российские специалисты готовы вылететь в Японию, однако правительство этой страны пока с соответствующей просьбой не обратилось. Самый крупный в истории Японии выброс радиации произошел в четверг на ядерном объекте в городе Такаймура. Неуправляемая цепная ядерная реакция сегодня остановлена. Точные причины аварии пока неясны. Однако, судя по всему, она была вызвана ошибкой персонала. Похоже, что рабочие положили в один из резервуаров для производства ядерного топлива в восемь раз больше урана, чем было положено, - почти 16 килограммов.

- Японское правительство отменило сегодня указание о создании особой зоны безопасности в радиусе 10 километров от ядерного объекта в городе Токай-мура. В Четверг там произошел мощный выброс радиации. Ситуация в этом районе нормализовалась, уровень радиации вошел в норму, объявил на пресс-конференции в Токио генеральный секретарь кабинета министров Нонака. Однако, по его словам, вокруг завода по производству ядерного топлива, где произошла авария, сохраняется "зона пустоты", куда имеет право заходить только спецперсонал. Решение правительства означает, что более трехсот тысяч жителей 10-километровой зоны могут вести обычный образ жизни. Ранее им было приказано оставаться в жилищах, плотно закрыв двери и окна. В 10-километровой зоне, по данным консульского отдела российского посольства в Токио, находятся 45 граждан России. Их безопасности ничто не угрожает.

(1999年10月1日分より)

それぞれの項目は比較的短く、構文的にも明快なので、初等文法を終了した段階で教材として取り上げても、学習者の負担にはならないであろう。ただ、いきなりロシアの国内ニュースを取り上げるのではなく、学習者が日本の報道を通じて情報に接し得るもの（日本関連の報道・国際ニュース・日本でも報道されたロシア語圏関連のニュース）を中心に取り上げるのが適切である。そうすれば、学習者は必要な情報を収集した上でロシア語のテキストと対比させることができ、内容を正確に理解できる。

4．放送メディア使用に際しての注意点

工夫によっては、有効な活用が期待できる放送メディアではあるが、ロシアの放送事情に特有の問題点に関しても指摘しておきたいと思う。

1）音声上の問題

ロシアのテレビ放送の音声は、やや響きを伴った高い音がするのが特徴で、日本や欧米先進国のテレビ放送に比べると聞き取りづらい。それでも、以前に比べれば音質は改善されてきてはいるが、録音技術に問題があるため、放送用スタジオの外で収録した番組の音質は明瞭とは言いがたい。

外国語の映画やドラマは吹き替えで放送されるのが一般的であるが、オリジナルの音声に吹き替えの音声をかぶせる方法が専ら用いられている。それゆえ、２つの外国語が同時に耳に入ってくることになり非常に聞きづらい。今年になって、北野武監督の「HANABI」が放映されたが、日本語とロシア語であっても、頭の中が混乱する。日本の洋画放送のように、副音声を用いて、吹き替えとオリジナルの音声を完全に分離させる方式や、アメリカで実用化されているクローズド・キャプション（聴覚障害者向けに開発された字幕システム）は、ロシアでは導入されていない模様である。翻訳台本などが

手に入る場合は別として、初級～中級の語学用の教材として利用するには、やや問題が伴うであろう。

2）放送内容の客観性

ロシアのマスメディアは、ほとんどが有力な政治家や財閥企業の配下にあり、それぞれの政治グループの宣伝活動と、政敵の攻撃に利用されている側面がある。「ロシア公共テレビ」(Общественное Российское Телевидение) と称してはいても、新興財閥の配下にある同局の報道姿勢は、現大統領寄りの偏ったものであり、NHKやBBCのような客観報道は期待できない。さらに、メディアの如何を問わず、政治・宗教・民族問題をテーマにする番組においては、予断や偏見を伴うものが少なからずあり、全く事実と反する場合も皆無ではない。それゆえ、マスメディアの提供する情報を使用する際は、かかる事情を十分説明した上で、明らかに偏向の見られる内容を含むものに関しては、慎重な使用を心がけるべきである。

3）教育的配慮が必要な映像表現

紛争や事件・事故が頻発する中で、現場の惨状が映し出される機会が増えているが、死体や負傷者の映像の扱いは、日本の放送コードと明らかに異なる。正視に耐えない映像が含まれる場合は、事前に注意をする必要があるだろう。

また、一般の番組にも必ずしも適切とはいいがたい要素（過度の性的表現や暴力的表現）を含むものがあり、興味本位のものとならないよう、理性的な判断が求められる。

4）翻訳版の映画・ドラマの利用に際して

日本人にとってなじみのある作品を使用できるという利点がある一方で、映画・ドラマの台詞の翻訳は、オリジナルへの厳密な忠実さが必ずしも要求されないことを指摘せねばならない。特に、「笑い」に関わる部分では、オリジナルからの逸脱が大きく、言語文化的背景を考察する点では興味深い材料となるであろうが、二言語対照学習の材料として用いるには適切であるとは言えない。

5．終わりに

一般放送の語学教育への応用については、未だ研究例が少ないように見受けられ[15]、方法論的に未確立の部分が多いように思われる。しかし、学習者としての筆者の体験からしても、テレビ・ラジオを用いた学習法がきわめて効果的であることは疑いない。本論では、これまでに筆者が試してみた方法を中心に、具体例をいくつか列挙したが、被験者の絶対数が少なく、更なる調査・研究が必要である。語学教育に関わる者が、具体的な活用例を交換しながら、一層効果的な教育法を探っていくことが必要であり、これが、ロシア語を含めた外国語教育の現場の活性化にもつながるものと確信する。

注

1) 現代のロシア社会では、文学の占める位置は日本よりもはるかに高く、市民の日常生活と密接な関係にあることも同時に指摘しておかねばならない。ラジオ放送では、文芸作品の朗読も盛んであるし、テレビでも、作家とその作品に関する番組は、日頃から多く放送されている。特に、プーシキン生誕200年に当たる1999年には、関連番組が連日のように放送された。ロシア文学を教室で取り上げる際にも、そのような番組を使用することで、作者あるいは作品に関して視覚的な予備知識を得ることが可能となり、より良い理解に貢献するはずである。

2) J.V. ネウストプニー　「外国人とのコミュニケーション」（岩波書店、1982年）161頁。

3) 1999年9月に放送されたものでは「刑事コロンボ」«Рейтенант　Коломбо»「アルフ」«Альф»　「X-ファイル」«Секретные материалы» などがあった。

4) A.G. Sennitt ed. "World Radio TV Handbook 1996" (Amsterdam,1996) p. 155-166.

5) 旧ソビエトの郵便規則では、未検閲のカセットテープおよびビデオテープは、国外への郵送が禁じられていた。

6) このほか、«PTP»「ロシアテレビ」の電波が3.875GHzで発信されていることを確認しているが、信号が微弱でノイズが多く、画質・音質ともに十分な視聴に耐えられるものではないので除外する。

7) 受信上の技術的側面に関しては、「ラジオライフ別冊衛星テレビ受信テクニック'95」（三才ブックス、1995年）に、具体的製品名を挙げた説明（図解を含む）がある。本書は刊行から数年経過しているが、ロシア衛星受信に関する部分は、現在でもほぼ有効である。最新の資料としては「月刊サテライトマガジン」（サテライトマガジン社、http://www.satemaga.co.jp）1999年9月号があり、外国衛星の受信に関する特集内で、製品入手先なども紹介されている。なお、阿部昇吉「マスメディア（テレビ・ラジオ）活用術」（「ロシア語ロシア文学研究」第30号172頁、日本ロシア文学会、1998年）の報告は極めて簡潔なもので、しかもデータに一部誤りがある。

8) 受信地によってアンテナの角度が異なるので、受信地別の細かな数値に関しては「ラジオライフ別冊衛星テレビ受信テクニック'95」167頁を参照せよ。

9) しかし、しばしば規範とは異なるアルファベットの読み方（たとえば、ф を [ef] ではなく[fe] とする）をする出演者も見受けられるので、注意が必要である。

10) ある種の数字の組み合わせでは、独特の読み方があることを説明する必要がある（たとえば、00となる場合、ноль ноль ないしдва ноля）。また、モスクワなどの大都市では三桁の局番もあるから、1000までの数詞を教えてから取り上げる方が効果的であるかもしれない。

11) 鈴木孝夫「日本人はなぜ英語ができないか」（岩波書店、1999）、134-5頁も参照せよ。

12) 鈴木孝夫は、大学の教養課程の英語教育においては、「英米の短編小説を読むとか、外国の様々な問題を扱った論説やエッセイなどを用いることを一切やめて、テクストのすべてを日本の歴史や社会、日本文学や日本人の書いたいろいろな種類の文章を、英語化したものに統一すべきだ」と主張する（上掲書、130-131頁）。学習者の既知の情報を活用することが言語学習において有効であるという点には、筆者も賛成であるが、諸分野での情報の共有化が世界的に進行しているを考えると、「日本中心主義」の教材選定が氏の主張するような学習者の「情報発進力」向上に必ずしも結びつくとは思われない。むしろ、世界が共有する関心事についても取り上げることも、時代に即応した自己表現力の向上にとって不可欠である。

13) インターネット上で Real Audio 技術を用いたラジオ放送が実用化され、«Exo Москвы» も一応は聴取は可能である。しかし、音声がとぎれとぎれになるなど、インターネットラジオ独特の欠点があり、音質面ではまだまだ満足の行くものではない。インターネット上の放送を語学教育で用いるには、一層の技術革新と次世代の大容量インターネットの出現を待たねばならないであろう。

14) 一週間の放送スケジュールは、«Маяк»　のホームページを参照せよ（時間はすべてモスクワ時間で表示されている）。テレビの一週間分の放送スケジュールに関しては、電子メールで無料配信するサービス（http://www.citycat.ru）がある。

15) 視聴覚外国語教育に関する研究には、昭和54-55年に大阪外国語大学から刊行された論集「視聴覚外国語研究」がある他、ロシア語教育におけるラジオ放送の利用に関しては、С.Д.Леонова «Возможности использования передач всесоюзного радио в процессе преподавания русского языка как иностранного» (*Русский язык для студентов-иностранцев. Сборник методических статей*　№ 25, Москва, 1988. с.148-157.) がある。

（東京外国語大学大学院博士前期課程地域文化研究科ヨーロッパ第三専攻　平成8年3月修了）
（横浜商科大学非常勤講師）